五臺山・金閣寺の構造とその教理的背景について

岩崎　日出男

問題の所在

不空三藏が大暦元年（七六六）、敕許を得て五臺山に金閣寺の建立を推進し、大々的にその文殊信仰を鼓吹したのは周知の通りである。筆者もかつて、「不空三藏の五臺山文殊信仰の宣布について」（『密教文化』一八一、四〇～五七頁、一九九三）の拙稿により、不空三藏による五臺山文殊信仰宣布の理由を論じ、結論として代宗皇帝の念持佛が普賢菩薩であったことにその大きな理由のあることを指摘した。一方、その五臺山文殊信仰の中心的建造物である金閣寺の構造や教理的背景については、佛頂思想との關係について論じた千葉照觀氏などの研究があるものの十分に解明されたとはいえないのが現状である。小稿では、從來の研究の是非を問うとともに新たな問題の提起とその解明にあたりたい。

五臺山金閣寺の構造と教理的背景に關する先行研究

金閣寺の構造と教理的背景に關する研究については、管見によれば現在まで以下のような研究がある。

1「金閣寺建立に見られる佛頂思想」『天台學報』二八　一四八～一五一、一九八五

2「不空譯經中の佛頂尊曼荼羅について」『天台學報』二九　一二〇～一二四頁、一九八七

3「不空の密教における佛頂尊關係の位置づけ」『大正大學

綜合佛教研究所年報』九、三三～四八頁、一九八七

4「不空の密教と金閣寺」『印度學佛教學研究』三五（二）、六七四～六七六、一九八七

5「不空における佛頂尊―法身に關連して―」『天台學報』三〇、一〇七～一一一、一九八八　以上、千葉照觀

6中田美繪「五臺山文殊信仰と王權」―唐朝代宗期における金閣寺修築の分析を通じて―『東方學』一一七、二〇〇九

7拙稿「不空三藏の五臺山文殊信仰宣布に關する諸問題」―特に中田美繪氏の拙論に對する批判への反論を中心として―『東アジア佛教研究』九、三～一五、二〇一一

千葉照觀氏は、早くからこの研究課題について論じ多くの見解を提示しており、特に先にも述べたように佛頂思想との關係において金閣寺の構造と教理的背景を理解しようとしている。そこで以下に千葉説の見解について、その主張と論據について檢證していきたい。なお、6の中田美繪氏も金閣寺の構造と教理的背景を含め、その建立の理由等について獨自な見解を提示されているが、その見解についてはすでに7の拙稿において、文獻上においても教理的にも根據をもたない見解であることを論證しているのでここでは觸れない。

千葉説の概要

圓仁の『入唐求法巡禮行記』から、[1]金閣寺が三層の建造物であることを前提に、金閣寺が三層（階）であることの理由と、その三層の第一層に文殊菩薩、第二層に金剛界五佛、第三層に頂輪王五佛が安置された理由を論じる。まず、不空三藏において金剛頂經と佛頂系の密教の直接的關わりが見當たらないことを明らかにした上で、金閣寺が三層（階）であることの理由として、不空譯『菩提場所説一字頂輪王經』が菩提流志譯の『一字佛頂輪王經』の再治本であることから、菩提流志譯の『一字佛頂輪王經』「大法壇品」に説く五院（第一院・佛頂尊、第二院・東方寶星如來、第三院・北方阿閦如來、第四院・西方無量光如來、第五院・南方開敷蓮華王如來）を不空三藏が自ら譯した『金剛頂經』に説く金剛界五佛に置き換え、またその五院は菩提流志譯の『一字佛頂輪王經』において、内院・中院・外院と表現し、更には「三種悉地」の用語もみられることから、金閣寺の三層構造は菩提流志譯の『一字佛頂輪王經』「大法壇品」に基づく三種悉地思想の反映と考え、金閣寺そのものが佛頂輪王曼荼羅であるとする。このことはまた、金閣寺の第二層に金剛界五佛を安置することと第三層に頂輪王五佛

の尊像を配置する根據ともされる。なお、第一層が文殊菩薩であることについては、五臺山文殊信仰によることを認めつつも、佛頂輪王曼荼羅の外院として文殊が配置された可能性を指摘する。さらには、金閣寺の名稱に關して『金剛頂經』『分別聖位修證法門』『三十七尊心要』に「須彌盧頂金剛摩尼寶峯樓閣」（金・閣）とあることから、金閣寺は「金剛摩尼寶峯樓閣」である可能性をも指摘する。また、金閣寺建立の動機についても自譯の經典である『菩提場諸說一字頂輪王經』の具現化を目的としたとされる。

以上、千葉氏の一連の考察に通底するものとして、不空三藏の密教が金剛界に重きを置くものではあるが、佛頂系の密教も重んじていたとする視點により論じられているのが特徴となっており、金閣寺の三層構造や尊像の配置をはじめ、その建立の理由についても佛頂系密教の教理的な背景を根據とすることが主張されている。

千葉說への疑義

i　金閣寺の三層構造は不空の創意か

さて、以上のような千葉氏の見解において、まず金閣寺の三層構造（三階建て）が『一字佛頂輪王經』「大法壇品」に基づく三種悉地思想の反映された不空三藏の創意とすることについてであるが、この見解の是非を考えるうえで重要な資料が存在する。それは永泰二年（七六六）に不空三藏が金閣寺建立を朝廷に願い出た上表である「請捨衣鉢助僧道環修金閣寺制一首」に

五臺山金閣寺

右、大興善寺沙門特進試鴻臚卿大廣智不空奏。上件寺、先聖書額寺宇未成。准開元二十四年、衢州僧道義至臺山所見文殊聖跡寺、號金閣院。有十三間居僧衆、云有萬人。臺殿門樓茲金所作。登時圖畫一本進入在內。天下百姓咸欲金閣寺成。人誰不願。令澤州僧道環日送供至山、遺慕道義禪師所見之事。發心奉爲國家依圖造金閣寺。院宇多少一如所見。

五臺山金閣寺

右大興善寺沙門特進試鴻臚卿大廣智不空奏す。上件の寺、先聖の書額なれど寺宇未だ成らず。開元二十四年、衢州の僧・道義、臺山に至りて見る所の文殊聖迹の寺に准へ金閣院と號す。十三間有りて僧衆居し、萬人有りと云ふ。臺殿・門樓は、茲れ金もて作る所なり。登りし時、一本を圖畫して進入して內に在り。天下の百姓、咸な金

閣寺の成らんことを欲す。人誰か願はざらん。澤州の僧・道環をして、日に供を送り山に至ら令むは、道義禪師所見の事を遺慕せんがためなり。發心して國家の奉爲に圖に依て金閣寺を造らん。院宇の多少は一に所見の如くにせん。

（『不空三藏表制集』巻二　大正五二・八三四上中）

とあって、開元二十四年に道義が五臺山で所見した金閣寺の圖が進奉されて宮中に在り、不空三藏はその宮中に藏されていた金閣寺圖により「發心して國家の奉爲に圖に依て金閣寺を造らん。院宇の多少は一に所見の如くにせん。」との願いをもって、金閣寺を造營しようとしたことが知られるのである。以上のことから、不空三藏は道義所見にして宮中に進奉されていた金閣寺圖に基づいて金閣寺を建立しようとしたことが明らかであり、このことは同時に金閣寺の三層であることが「佛頂系密教の教理的な背景を根據とした不空三藏の創意」によるものではないことの證左ともなるものであろう。

なお「道義所見」、すなわち「道義の見た文殊菩薩の化作による金閣寺」[2]は五臺山文殊の信仰上、どのような意味を持っていたのかといえば、「請抽化度寺萬菩薩堂三長齋月念誦僧制一首」に

化度寺文殊師利護國萬菩薩堂三長齋月念誦僧二七人。（中略）右特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空奏。伏以化度寺護國萬菩薩堂、竝依臺山文殊所見。乘雲駕象凌亂楹梁、光明滿堂不異金閣。

化度寺文殊師利護國萬菩薩堂三長齋月の念誦僧、二七人。（中略）右、特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空奏す。伏して以るに化度寺護國萬菩薩堂は、竝な臺山の文殊所見に依る。雲に乘り象に駕し、楹梁に凌亂せし光明は、堂に滿ること金閣に異ならず。

（『不空三藏表制集』巻二　大正五二・八三四下～八三五上）

という不空三藏自らの言葉（化度寺護國萬菩薩堂の莊嚴が文殊の化作した五臺山金閣寺に異ならないこと）からも窺うことができるように、五臺山金閣寺の尊嚴と信仰の源が、金閣寺が文殊菩薩の化作によるものであるというところに存在していることは明らかであろう。このようなことは五臺山文殊信仰の歴史において、文殊の化現・化作ということが信仰上きわめて重要視されたということからも、そのことは裏付けられるであろう。[3]要するに、金閣寺という寺は文殊菩薩の化作による寺であることにこそ尊嚴竝びに信仰上の最も大きな價値と意味とが存在するといえるのであり、當然のことながらその化

作された寺を現實に寸分違わず造營建立することにも尊嚴竝びに信仰上の大きな價値と意味とが存在するということである。

ii　不空による佛頂系密教の重視と、それを根據とした金閣寺を佛頂輪王曼荼羅であるとすることの是非

千葉氏の「不空が佛頂系密教を重視した」という根據は、先にその是非を論じた「金閣寺の構造と尊像の配置及び建立の理由には教理的背景に佛頂系密教の教理が存在する」という論據の他には、入藏を請うた自選の翻譯經典目錄七一部中、佛頂尊を說き言及する經・軌・論が十五部を數える（多い）という理由のみである。すでに「金閣寺の構造と尊像の配置及び建立の理由には教理的背景に佛頂系密教の教理が存在する」ということについては、先に明らかにしたように、金閣寺の三層の構造が道義所見に基づくものであり佛頂系密教の教理的背景とは無關係であったことから、金閣寺を佛頂輪王曼荼羅であるとすることは認められず、したがって自譯の經典である『菩提場諸說一字頂輪王經』の具現化を目的としたという金閣寺建立の理由も認められないこととなろう。そもそも、佛頂系密教經典の翻譯が多いからといって佛頂系密教を重視している證左であるというのは性急な結論ともいうべきものである。いずれにせよ、不空が佛頂系密教を重視したということと金閣寺を佛頂輪王曼荼羅であるとすることは、結果として兩者共に認められないことであると考えられる。

iii　金閣寺に文殊菩薩が安置された理由

前掲した不空三藏の「請捨衣鉢助僧道環修金閣寺　制一首」に

夫以文殊聖迹、聖者爲主。

夫れ文殊の聖跡たるを以て、聖者（文殊菩薩）が主と爲る。

とあることから、金閣寺に祀られることは勿論、その主尊たることも當然であって、ことさらに他の理由・根據の必要でないことは明らかである。なお、金閣寺の第一層に安置された理由については後述する。

iv　金閣寺に金剛界五佛と五佛頂尊が安置された理由とその意義

金閣寺の三層構造は、道義所見のものであり不空の創意ではないものの、前掲した圓仁の『入唐求法巡禮行記』巻三に

次上第二層、禮金剛頂瑜伽五佛像。斯乃不空三藏、爲國

所造。依天竺・那蘭陀寺樣作。佛每有各二脇士、竝於板檀上列置。次登第三層、禮頂輪王瑜伽五佛金像。佛每各一脇士菩薩。二菩薩作合掌。像在佛前面、向南立。佛菩薩手印容貌、與第二層像各異。粉壁內面、畫諸尊曼荼羅、塡色未了。是亦不空三藏、爲國所造。

次に第二層に上り、金剛頂瑜伽五佛の像を禮す。斯れ乃ち不空三藏が、國の爲に造る所なり。天竺・那蘭陀寺の樣に依りて作る。佛每に各二脇士有り、竝びに板檀上に於て列置す。次に第三層に登り、頂輪王瑜伽五佛の金像を禮す。佛每に各一脇士菩薩あり。二菩薩は合掌を作す。像は佛の前面に在り、南に向かって立つ。佛菩薩の手印容貌は、第二層の像と異なれり。粉壁の內面には諸尊の曼荼羅を畫くも、塡色は未だ了らず。是れ亦た不空三藏が、國の爲に造る所なり。

（『大日本佛敎全書』一一三　一三九～四〇頁、遊方傳叢書一所收）

と記されていることから、第二層と第三層に安置する尊像とその莊嚴について不空三藏の關與が認められる。なお、ここで注意しなければならないこととして、嚴密な意味において不空三藏の關與といった場合、安置する尊像に對する監修等の關與と安置する尊像の場所に對する關與ということを考慮する必要がある。ところで、不空三藏に關係する佛事事業において、この金閣寺に見られるような金剛界系の密敎と佛頂系の密敎が組み合わさされるような佛事事業は存在したのかといえば、ただ一例のみ存在する。それは、以下に揭示する史料であって不空が天寶十二年（七五三）、河西節度使・哥舒翰に招請されたのであるが、灌頂授受とともに經典の翻譯を行った際、その翻譯した經典が金剛頂經と佛頂系の經典・儀軌であったことである。

癸巳至天寶十二載、河西節度使御史大夫西平郡王哥舒翰奏。不空三藏行次染患養疾韶州。令河西邊陲請福疆場。上依所請敕下韶州。追赴長安止保壽寺。制使勞問、錫賚重重。四事祇供、悉皆天賜。憩息踰月令赴河西。至武威城住開元寺。節度使迎候是物皆供、請譯佛經兼開灌頂。演瑜伽敎置荼羅。使幕官寮咸皆諮受、五部三密靈往實歸。時西平王、爲國請譯。金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經三卷、行軍司馬禮部郎中李希言筆受。又譯菩提場所說一字頂輪王經五卷、及一字頂輪王瑜伽經一卷、幷一字頂輪王念誦儀軌一卷。竝節度判官監察侍御史田良丘筆受。又承餘隙兼譯小經。

癸巳天寶十二載に至り、河西節度使・御史大夫・西平郡王・哥舒翰奏す。不空三藏行次に染患し疾を韶州に養ふ。河西の邊陲をして福を疆場に請は令めん、と。上、請ふ所に依りて敕を韶州に下す。追って長安に赴き保壽寺に止まる。制使は勞問し、錫賚は重重なり。四事の祇供は、悉く皆天賜なり。憩息すること月を踰へ河西に赴か令む。武威城に至り開元寺に住す。節度使は是を迎候し物は皆供して、佛經を譯し兼ねて灌頂を開かんことを請ふ。瑜伽教を演べ（曼）荼羅を置く。使幕の官僚は咸く皆五部三密を諮受し、靈（虛）しく往きて實ちて歸へる。時に西平王、國の爲に譯を請ふ。金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經三卷、行軍司馬・禮部郎中・李希言筆受。又譯すに菩提場所說一字頂輪王經五卷、及び一字頂輪王瑜伽經一卷、幷せて一字頂輪王念誦儀軌一卷。竝びに節度判官・監察侍御史・田良丘筆受。又餘隙を承け兼ねて小經を譯す。（玄宗・天寶十三載・七五四）

（『貞元釋經錄』卷十五、大正五五・八八一中）

※（　）筆者、補

金剛頂經と佛頂系の經典・儀軌が同時に翻譯された理由とその意義

この哥舒翰の經典翻譯の請によって行われた翻譯事業は、不空三藏にとって渡印して歸朝した後の本格的な最初の經典翻譯でもあり、言うまでもなく翻譯された金剛頂經と佛頂系の經典・儀軌はその將來した膨大な密教經典の中からであったのであるが、その本格的な最初の經典翻譯であることと膨大な密教經典の中から翻譯されたことは、不空三藏にとってどのような意義をもつものであったのであろうか。言葉を變えて言えば、本格的な最初の經典翻譯に、將來した膨大な經典・儀軌の中から教理的には直接的な關わりの存在しない金剛頂經と佛頂系の經典・儀軌が翻譯された理由とはどのようなものであったのかということである。このことについてはまず、先の灌頂授受とともにこの哥舒翰の下での經典の翻譯が、不空三藏にとっていずれも修功德信仰に基づいた「福」の獲得のためであったことは、哥舒翰の不空三藏を招聘した理由であった「河西の邊陲をして福を疆場に請は令めん」ということの解明を通して、すでに「不空三藏の密教宣布における修功德の役割とその意義　―哥舒翰の不空三藏招聘から

長安における密教宣布の展開とその特質―」（『密教學研究』四四、二三～四八頁、二〇一二）の拙稿で論證した。なお、「修功德」信仰というのは「（必ず福德の應報を得る）佛教的善であり、具體的には財帛を喜捨して造寺造佛寫經をなし、法事を修し、僧に供養し、繡織・繪畫・幢幡等で佛寺を莊嚴すること等、形に現われたいわゆる供養三寶の事業であって、善惡應報の信仰の上に行われたものである」と定義されるものである。（塚本善隆　1975「唐中期以來の長安の功德使　六代宗時代の功德使の性質」『塚本善隆著作集　中國中世佛教史論攷』三　大東出版社、二五一―八四頁）

修功德事業としての側面からみた金剛頂經と佛頂系の經典・儀軌の翻譯の意義

では、このような修功德事業としての側面からみた金剛頂經と佛頂系の經典・儀軌の翻譯の意義についてどのようなことが考えられるのであろうか。まず金剛頂經については、不空三藏自ら

其所譯金剛頂瑜伽法門、是成佛速疾之路、其修行者必能頓超凡境達于彼岸。餘部眞言諸佛方便、其徒不一。

其の譯する所の金剛頂瑜伽法門は、是れ成佛速疾の路にして、其の修行する者は必ず能く頓に凡境を超え彼岸に達す。餘部の眞言は諸佛の方便にして、其の徒一ならず。（「三朝所翻經請入目錄流行表一首」『不空三藏表制集』卷三　大正五二・八四〇中）

といい、不空三藏の密教の根幹をなし他の教法に比べることのできない最尊の教えであることが理解される。そして、そのような教えを説く經典の翻譯は、經典翻譯における修功德上極めて大きな功德といえるのであり、當然その果報たる福も大なるものが存在するといえるであろう。なお、この金剛頂經は護國にも關わりがあり、特にそこに說かれる三十七尊が護國の尊とされたことについては、以前に指摘したとおりである。[4] 一方、佛頂系の經典・儀軌については、實際に譯された『菩提場所說一字頂輪王經』卷一に

善男子、有此眞言轉輪王佛頂、若有人誦持處、五百由旬內一切明、世間出世間不流通、不成就。汝等所說淸淨眞言、所加持眞言不成就、亦不往、亦不現威德。若纔憶念此眞言、一切世間出世間眞言、悉地皆成就。汝等所說加持眞言身、一切不可成就、不現應驗者、以此眞言應成就之。

善男子よ、此の眞言と轉輪王佛頂有りて、若し人有りて

誦持する處には、五百由旬内の一切の明、世間出世間において流通せず、成就せず。汝等が所説の清淨の眞言、加持する所の眞言成就せず、亦往せず、亦威德を現ぜず。若し纔に此の眞言を憶念すれば、一切の世間出世間の眞言、悉く皆成就す。汝等が説く所の加持眞言身の、一切成就す可からざる應驗を現ずまじき者も、此の眞言を以て應に之を成就すべし。

（『菩提場所説一字頂輪王經』巻一「示現眞言大威德品第二」大正一九・一九五下）

とあり、いわゆる「金輪の五百由旬斷壞の德」、すなわち一字（佛）頂輪王が威德熾盛であることのため、この法を修すれば五百由旬内において他の尊の法を修しても、この尊の德に覆われてその悉地を得ることができないといわれ、また一方、他の法を修して效果のない時、この尊の眞言を誦すればその助けを得て一切の成就を得ることができると説かれるのである。このことから、この經典が修功德においては缺くべからざる内容を説く經典であることが知られるであろう。このような「金輪の五百由旬斷壞の德」は、上記以外の經典では

修行諸尊者、五百由旬内　尊皆不降赴、亦不賜悉地　以輪王威德斷壞諸法故。

諸尊を修行する者、五百由旬の内には尊皆降赴せず、亦た悉地を賜はず、輪王の威德を以て諸法を斷壞するが故なり。

（『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌』大正一九・三二四中）

また、

如金輪王等佛頂經説、若有人誦持頂輪王等佛頂、五百由旬内修餘部密言者、請本所尊念誦、聖者不降赴、亦不與悉地、由一字頂輪威德攝故。

金輪王等の佛頂經に説くが如きは、若し人有りて頂輪王等の佛頂を誦持すれば、五百由旬の内に餘部の密言を修する者、本所尊を請じて念誦するに、聖者降赴したまはず、亦た悉地を與へたまはず、一字頂輪の威德に由りて攝せらるる故に。

（『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』大正二一・四六上）

といった、不空三藏自譯とされる佛頂系の經典・儀軌にも説かれている。要するに、不空三藏による佛頂系の經典・儀軌の翻譯の意義は、修功德事業を過失・遺漏なく完遂させるためのものであったということがいえよう。なお、不空三藏の密教教理における佛頂尊の位置付けとして、「金剛頂經」廣本

の内容を説いた不空譯『金剛頂瑜伽十八會指歸』の初會・一切如來眞實攝教王の降三世大品（摩醯首羅天等の剛强難化の者たちを調伏するための教えが説かれる）に、

此中説大佛頂及光聚佛頂眞言及契。亦通一字頂輪法。

此の中には大佛頂及び光聚佛頂の眞言及び契を説く。亦た一字頂輪の法に通ず。

（大正一八・二八五中）

とあり、佛頂尊に降三世としての性格が付與されている。不空三藏の密教、特にその宣布におけるこの佛頂尊に降三世としての性格が付與されているということの意義は、佛頂尊には先に考察したように修功德事業を過失・遺漏なく完遂させる效能の認識とともに護國の效能をも有する尊格としての可能性が認められるということであり、このことも金剛頂經の翻譯とともに佛頂系の經典・儀軌の翻譯がなされた理由であったのではないかとも考えられるであろう。

金閣寺の第一層に文殊菩薩、第二層に金剛界五佛、第三層に頂輪王五佛が安置された理由

哥舒翰の經典翻譯の請によって行われた金剛頂經と合わせて佛頂系の經典・儀軌が翻譯された理由は、福の獲得という修功德事業を過失・遺漏なく完成させるためであり、加えて護國に關わる可能性も含まれていたことが明らかとなった。以上のことから、金閣寺に文殊菩薩を祀ることは、前述した「夫れ文殊の聖跡たるを以て、聖者（文殊菩薩）が主と爲る。」という不空三藏の言葉から當然のこととして、金閣寺という一つの建造物中に金剛界五佛と頂輪王五佛を同時に祀ることの理由と目的については、いずれもが修功德事業を完成させるためであり、また護國に關わる可能性もあったことが明らかとなった。そしてこのことは、金閣寺の寺としての性格にも窺うことができるで。なぜなら、不空三藏の金閣寺建立の目的は同じく得福と護國であったからである。[5] そこで、最後に殘された問題として、三層それぞれへの尊像配置の理由は一體どのようなものであったのかということがある。具體的には第一層に文殊菩薩、第二層に金剛界五佛、第三層に頂輪王五佛が安置されたのはどのような理由からなのかという問題である。なぜこのことが問題となるのかといえば、通常の觀念では上下の空間の存在する場において、いずれかが上となりまた下となるのかは、一般的にはその存在の尊卑に基づくものと假定されるからである。そのような意味において、三層中の第一層に先ず文殊菩薩が安置されるのはごく自然な

ことであるとも理解される。なぜなら、それは言うまでもなく菩薩と佛・如來の序列に隨っていると考えられるからである。なお、「閣」というような重層の建造物において、その下層に文殊菩薩が安置されたと思われる例が存在する。それは、不空三藏が代宗皇帝に請願して大興善寺内に大曆八年（七七三）の二月から九年の五月にかけて造營されたと考えられる「大聖文殊鎮國之閣」（大聖文殊閣）に

吾奏聖人造閣。下置文殊菩薩、上安漢梵之經。爲國福田、永代供養。

吾、聖人に奏して閣を造る。下に文殊菩薩を置き、上に漢梵の經を安んず。國の福田と爲し、永代に供養せよ。

（「三藏和上遺書一首」『不空三藏表制集』巻三　大正五二・八四四下）

というものであり、ここに「文殊菩薩」とあるのは「文殊菩薩像」であって、閣の下層に文殊菩薩像が置かれ、上層に漢梵の經典が架藏されたと考えられるものである。

次に問題は第二層に金剛界五佛が安置され頂輪王五佛が最上層に安置された理由である。

ところで、この問題に關しては、先に嚴密な意味において不空三藏の關與といった場合、安置する尊像に對する監修等の關與と安置する尊像の場所に對する關與ということを考慮する必要があることを指摘したが、尊像について「天竺・那蘭陀寺の様に依りて作る。」という記述や該當する箇所の内容が尊像の形態について記されていることから、この場合の「不空三藏の關與」は安置された尊像に對するものと限定することは可能であろう。これらのことから、この問題の核心は安置する尊像の場所に對する關與ということについてである。

さて、この問題の要點であるが、金剛界五佛が不空三藏の密教にとって最尊最上の尊格であることは言を俟たない。ところがそれにも拘らず金閣寺においては、なぜ頂輪王五佛が最上層となり金剛界五佛はその下に安置されるのかということである。なおこの問題については、すでに前掲したように、千葉氏はこの事柄をもって不空三藏の密教は金剛界に重きを置くものではあるが佛頂系の密教も重んじていたとし、また金閣寺は佛頂尊を中心とする密教が重要な位置を占めていたとことの證左とするのであるが、すでに檢證したように金閣寺が三層の構造であることの背景に佛頂系の密教は關係のないことを明らかにしたので、改めて二層と三層の尊像の配置については佛頂系の密教教理とは別の理由を考察し明らかにすることが必要となるであろう。

そこで、この問題を考察するにあたり特に重要な示唆を與える史料として注目されるのは、不空譯の『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』である。そこには

以此三十七內證無上金剛界分智威力加持、頓證毘盧遮那之身、從無見頂相、流出無量佛頂法身、雲集空中、以成法會。

此の三十七內證無上金剛界分智威力加持を以て、頓に毘盧遮那の身を證し、無見頂相に從り、無量の佛頂法身を流出して、雲の如く空中に集まりて、以て法會を成す。

（大正一八・二九一下）

と說かれており、「毘盧遮那佛が無量の佛頂法身を流出する」ということが記されている。勿論、ここにいう佛頂法身が頂輪王五佛であるかどうかは不明であり確かめようのないことではあるが、ここで重要なのは「流出・生み出される」こととそれが「雲の如く空中に集まりて、以て法會を成す」というイメージ、すなわち「流出されたものは上方に在る」というイメージである。このようなイメージにおいて、少なくとも教理的には金剛界五佛の上に頂輪王五佛の在ること、すなわち「上下」の位置が「尊卑」という相互關係にならないことは明らかであろう。「流出・生み出される」ということにおいて、金剛界五佛の上に頂輪王五佛が在るのは教理的には問題のないことであると理解されるのである。ただしかし、このような教理的可能性を檢證し得るような具體的な事柄、すなわち金閣寺の二層と三層の尊像の配置が「流出」の教理に基づくものであり、もしくは影響したといったような言說は、管見では金閣寺及び不空三藏に關するすべての史料の中に見いだせないのが現狀であり、あくまで推測の域を出ないという憾みがある。このようなことから、金閣寺に金剛界五佛と頂輪王五佛を安置する理由は明らかとなったものの、頂輪王五佛を金閣寺の最上層に安置する理由については、殘念ながら明確な理由を詳らかにしないということになろう。

ところで、以上のようなイメージに基づく金剛界五佛と頂輪王五佛の關係、すなわち金剛界五佛の上に頂輪王五佛が在ることについては、不空譯とされるも三藏以後の撰述が明らかである『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』[6]において、

則塔中方東阿閦如來也。（中略）卽塔中方之南寶生如來也。（中略）卽塔中方之西阿彌陀如來也。（中略）卽塔中方之北不空成就如來也。（中略）卽塔之正中毘盧舍那如來也。（中略）如此又住頂生三昧、而現頂生之身多矣。今塔之上方、所以獨有五輪王會者、蓋以諸頂生身。皆攝入此

無上五頂智焉。至如方不得而究者、佛之頂相也。是至勝之法亦然。不可得其際也、故稱頂焉。其五頂王又一切眞言尊宰割之主也、故稱王焉。就五頂輪、而金輪爲之最。則ち塔の中方の東は阿閦如來なり。（中略）卽ち塔の中方の西は阿彌陀如來也。（中略）卽ち塔の中方の北は不空成就如來なり。（中略）卽ち塔の正中は毘盧舍那如來なり。（中略）此の如く又頂生三昧に住して、而して頂生の身を現ずること多し。今塔の上方、獨り五輪王會の有る所以の者は、蓋し諸の頂生の身を以て、皆此の無上五頂智に攝入せんがためなり。得て究む可からざるが如きに至る者は、佛の頂相なり。是れ至勝の法なるも亦然り。其の際を得可からざるなり、故に頂と稱す。其の五頂の王は又一切眞言尊宰割の主なり、故に王と稱す。五頂輪に就いて金輪は之を最と爲す。

（大正一八・二九八上～下）

と記され、明確に毘盧舍那如來から頂輪王五佛が流出し、金剛界五佛の上方に五輪王會の在ることが說かれている。これは先に述べた推測が、不空三藏以後に經典の姿を借りて具體化（明文化）したことを示すものであろう。このような經典による具體化（明文化）は、本來、金剛頂經と佛頂系の密敎に直接的關係を見出せないということや『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』が不空三藏以後の成立であることを考慮するならば、現實に存在する金閣寺の尊像配置に影響を受けた結果とも考えられることは可能であろう。なぜなら、ここに說かれる尊像の配置は上中下に區分された建造物としての「塔」の中での構成であり、それは直截に金閣寺の三層構造を彷彿させるものがあるからである。

結

以上、五臺山・金閣寺の構造とその敎理的背景について千葉說の是非の議論を通して考察してきたのであるが、これまでの考察をまとめるならば、まず金閣寺の三層構造の根據が道義所見に存在するのであり、不空三藏の創意ではないことが明らかとなった。次に金閣寺に文殊菩薩が安置されることは、當然のことながら金閣寺が文殊の聖跡であることにその理由があったが、その金閣寺に金剛界五佛と五佛頂輪王が同じく安置されたことについて、本來直接的關わりのない金剛界系と佛頂系の密敎のこのような組み合わせは、不空三藏の密敎宣布の樞要であった修功德事業による得福に關係するこ

とが明らかとなった。

また、文殊菩薩像を除く金剛界五佛と五佛頂輪王の尊像の像様に關しては、不空三藏の監修等の關與が認められると考えられたが、その安置の場所（階層）において、特に金剛界五佛が第二層の中層に安置され五佛頂輪王が第三層の最上層に安置されたことについては、この兩尊の間に「流出」という教理的背景は存在するものの、その教理に基づいて安置されたという確證は存在しないことから明確な理由を詳らかにしないことが明らかとなった。

注

（1）　參考として、『入唐求法巡禮行記』の該當箇所を書き下し文により以下に記す。

（開成五年七月）二日、義圓供主及び寺中の數僧と共に、金閣を開きて大聖文殊菩薩の青色の獅子に騎れる聖像を禮す。金色の顏貌は端嚴にして比喩すべからず。（中略）閣は九間三層、高さ百尺餘。壁・簷・椽・柱は處として畫ざるはなし。内外は莊嚴にして世の珍異を畫き、顯然として獨り杉林の表に出ず。白雲は自ら下に在りて靉靆たり。碧層は超然として高く顯はる。次に第二層に上り金剛頂瑜伽五佛の像を禮す。斯れ乃ち不空三藏が國の爲に造る所なり。天竺・那蘭陀寺の様に依りて作る。佛毎に各二脇士あり、竝びに板檀上に於て列置す。次に第三層に登り、頂輪王瑜伽五佛の金像を禮す。佛毎に各一脇士菩薩あり。二菩薩は合掌を作す。像は佛の前面にあり、南に向かって立つ。佛菩薩の手印、容貌は第二層の像と異なれり。粉壁の内面には諸尊の曼荼羅を畫くも塡色は未だ了らず。是れ亦た不空三藏が國の爲に造る所なり。瞻禮已に畢って、閣を下り普賢道場に到って經藏閣を見る。（中略）次に持念曼荼羅道場を開く。尊像を禮拜す。此れ則ち不空三藏の弟子含光が李家をして昌運長遠ならしむる爲に敕を奉じて持念せるところなり。修法の道壇は面三肘、白檀汁を以て泥を和して塗作す。風吹く時毎に香氣は遠く聞こゆ。金銅の道具は甚だ多く、惣て檀上に著く。次に普賢堂を開き、普賢菩薩の像を禮す。三像は竝立して背上に一菩薩を安置す。堂の内外は莊嚴にして綵畫・鏤・刻は具さに言ふ可からず。

『入唐求法巡禮行記』巻三（『大日本佛教全書』一一三　二三九～四〇頁、遊方傳叢書一所收）

（2）　參考として、『廣清涼傳』の該當箇所を書き下し文により以下に記す。

「道義和尚入化金閣寺　十五」

（道）義遽に覺一に隨ひ。東北に向って行くこと二三百歩ばかり、目を擧ぐるに一金橋を見る。（道）義卽ち隨って登る。乃ち金閣寺なり。三門の樓閣は金色晃曜として目を奪ひ、大

閣は三層にして上下九間なり。之を覩て驚異、虔心に禮を設く。遂に寺庭に入るに、堂殿廊廡は皆、金寶もて閒じへ飾る。獨り門に當れる大樓、及び度る所の橋は純に紫磨の眞金を以て之を成る。（中略）大聖復た覺一を召し、阿師を送りて十二院に遊べと。義は覺一と與に諸院を遍歴して修謁す。大食堂の前に至るや、多くの僧侶有り。或は禪、或は律。若は坐し、若は行す。數は約萬に盈つ。或は復た受禮し、或は相ひ承接する者あり。十二院の題額は各の異なる。

東廊の六院　大聖菩薩院　觀音菩薩院　藥王菩薩院　虚空藏菩薩院　大慧菩薩院　龍藥菩薩院

西廊の六院普賢菩薩院　大勢至菩薩院　藥上菩薩院　地藏菩薩院　金剛慧菩薩院　馬鳴菩薩院

義巡謁畢る。老僧義を遣りて早く歸らしむるに、寒山は住まり難しと。道義遂に老僧を辭す。寺を出ずること百歩。迴顧すれば已に所在を失ふ。但だ空山の喬木たるのみ。方に化寺なることを知る。

『廣清涼傳』巻中　大正五一・一一一三中～一一一四上

(3)　五臺山における文殊菩薩化現譚は數多く、圓仁も『入唐求法巡禮行記』の五臺山巡錫中（巻二～巻三）の日記に、五臺山において目に見えるものはすべてが文殊菩薩の化現・化作と心得るべきことや、懐妊した女性に化現しお腹の中の子の分まで飯食を乞うた話や僧形に化現し皇帝に五臺山の地を乞うた話などを紹介している。圓仁自身も文殊菩薩化現の靈瑞である五道の光明や色光雲、聖燈を見たことが記されている。なお、このような文殊菩薩の化現が五臺山文殊信仰の核心であることについては、白須淨眞「内陸アジア・東アジア・チベット世界における文殊信仰の歴史的トポロジー（位相）―その序章：九世紀後半における比叡山「文殊樓」創建の史的意義」『西藏自治區―青海省を結ぶ藏族の工藝美術と藝能の文化　その資料と保存に關する研究』（服部等作編：平成十五～十八年度文部科學省科學研究補助金、研究成果報告書、六七～九六頁。二〇〇七）を參照。

(4)　拙稿「不空三藏の護國活動の展開について」（『印度學佛教學研究』四二-一、二四九頁、一九九三）を參照。

(5)　拙稿「不空三藏の密教宣布における修功德の役割とその意義　―哥舒翰の不空三藏招聘から長安における密教宣布の展開とその特質―」（『密教學研究』四四、二三～四八頁、二〇一二）を參照。

(6)　『國譯一切經』密教部第三「金剛頂瑜伽三十七尊出生義」解題（大東出版社、一九六九）及び、三崎良周『台密の研究』「第六章　佛頂系の密教」一二二～二三頁、創文社、一九八八）を參照。

〈キーワード〉五臺山、金閣寺、不空三藏、文珠菩薩、修功德